3. モラエスがみた「幸福な日本人」

佐藤 征弥

1. はじめに

モラエス（Wenceslau de Moraes）の作品には、弱者に対する深い同情や共感がしばしば表れる。最初の著書 “Traços do Extremo Oriente : Siam, China, Japão”[1] が刊行されたのは彼が 40 歳の時で、遅いデビューであるが、このような作風はできあがっており、序文の中でデーサ（Vicente Maria de Moura Coutinho Almeida d'Eça）は、モラエスの特徴として「人間のみじめさに対する深い同情」を挙げている。それが最も色濃く表れているのは、日本で一緒に暮らした二人の女性、福本ヨネと斎藤コハルが病で相次いで亡くなってから書かれた “Ó-Yoné e Ko-Haru”（邦題『おヨネとコハル』）[2]である。モラエスは、フランスの作家ピエール・ロチ（Pierre Loti）の『死と憐れみの書』[3]の「憐れみ」のまなざしに共感を抱いており、『おヨネとコハル』はモラエス版の『死と憐れみの書』であるといえる[4,5]。『おヨネとコハル』の中で彼は「私たち—老人、人生の経験者—は、どんな不幸な人たち、あるいはそういう人たちのただの思い出さえも慰めることのできる憐憫の汲めども尽きない泉の持主とならなければならない。」と自らの信条を表明している[6]。このような信条は、普段の生活の態度においても表れていた。モラエスが徳島で過ごした時期に、近隣住民と交わした会話において彼が最も発した言葉は「よろしい」であり、その次に多かったのが「かわいそう（可哀想、カワイソー）」であった [5]。「かわいそう」はモラエスにとって特別な言葉であり、自分にとって「神聖なことば」であると『おヨネとコハル』の中で書いている。

では、反対の概念である「幸福」について、彼はどう考えていたのだろうか。江戸末期から明治時代にかけて日本を訪れた西洋人は、日本人が幸せそうに見えることを口々に指摘している[7]。1871 年（明治 4）に来日したオーストリアの外交官ヒューブナー（Alexander von Hübner）は「衆目の一致する点が一つある。すなわち、ヨーロッパ人が到来した時からごく最近に至るまで、人々は幸せで満足していたのである。」と記している[8]。多くの西洋人

---

[1] W. de Moraes. “Traços do Extremo Oriente : Siam, China, Japão”.Livraria de A. M. Pereira (1895).
[2] W. de Moraes. “Ó-Yoné e Ko-Haru” . Renascença Portuguesa (1923).
[3] Pierre Loti. “Le livre de la pitié et de la mort”. P., Calmann-Levy (1891).
[4] 佐藤征弥. モラエスの憐れみのまなざし– ロチ、ハーンを先達として」日本比較文学会第 49 回関西大会 (2013).
[5] 佐藤征弥・高木佳美・石川榮作・宮崎隆義.「ヴェンセスラウ・デ・モラエスの日本語会話能力—会話能力の検証および会話内容からみえる人物像について—」徳島大学地域科学研究 第 8 巻（2018）8-26 頁.
[6] W. de Moraes 著. 岡村多希子訳.『おヨネとコハル』ことのは文庫（2023）92-93 頁.
[7] 渡辺京二『逝きし世の面影』葦書房（1998）.
[8] アレクサンダーF.V.ヒューブナー著.市川慎一・松本雅弘訳.『オーストリア外交官の明治維新—

にとって幸福そうに見える日本人の姿は、モラエスの目にもまた同様に映り、後述するように彼の著作にも「幸福な日本（人）」という表現が散見される。モラエスがみた日本人の幸福とはどういった点であったのか、そして、彼が考える幸福、そして彼自身の幸福とはどのようなものであったのだろうか。本稿では、モラエスの著作から「幸福」「幸せ」と表現されている箇所を抽出し、モラエスの考える幸福について掘り下げることを試みた。

2. 作品に描かれた「幸福」「幸せ」

2−1. テキスト

モラエスの著作の中から年代順に “Traços do Extremo Oriente : Siam, China, Japão” （1895）（邦題『極東遊記』/『極東素描』）、“Dai-Nippon (O grande Japão) ” (1897)（邦題『大日本』）、“Cartas do Japão” （1992-1913）（邦題『日本通信』）、“O “Bon-odori,, em Tokushima” （1916）（邦題『徳島の盆踊り』）、“Ó-Yoné e Ko-Haru” （1923）（邦題『おヨネとコハル』）、“Relance da Alma Japonesa” （1926）（邦題『日本精神』）の原著をテキストとした。そしてこれらの中でポルトガル語で「幸せ」「幸福」を意味する名詞 “felicidade” や形容詞 “feliz” “ditoso” が使用されている文章を抽出し、何に対してどのようなニュアンスで用いられているか調べた。“feliz” と “ditoso” はほぼ同じ意味だが、後者は意味がより強調される。“feliz” が「幸せな」としたら “ditoso” は「この上ない幸せの」「至福の」というニュアンスで使用される。なお、本稿で取り上げるのは、日本人や徳島の人々に対して用いられている場合であったり、モラエスの幸福に対する考えがよく表れている場合のみとした。

以下、順に紹介していく。

2-2. “Traços do Extremo Oriente : Siam, China, Japão” （1895）（邦題『極東遊記』/『極東素描』）[9]

本作は、モラエスが軍人として勤務していた時期に書いた小品を 1 冊にまとめたもので、彼のデビュー作である。副題にシャム、中国、日本とあるように、モラエスが勤務で滞在したアジアの国々の印象記であり、タイとシンガポールについて 1 つずつの小品、中国（マカオとホンコンも含む）について 19 の小品、そして「日本の追慕」と題された比較的長い作品が含まれている。

「日本の追慕」は、二度目の来日から戻った 1904 年（明治 27）2 月にマカオで書かれた。「黄色い地獄」と呼んで毛嫌いしていたマカオでの生活にうんざりしていたモラエスは、日本の緑豊かな自然に魅了され、マカオに戻ってからも熱病にうなされるように日本に恋

世界周遊記日本篇』新人物往来社（1988）.

[9] 最初の邦訳『極東遊記』は 1941 年に花野富蔵の訳で中央公論社から出版され、最新では 2018 年に岡村多希子訳で『極東素描』というタイトルでモラエス研究会により出版された。本稿では、『定本モラエス全集 I』集英社(1969)に収められている花野訳を用いた。

焦がれ、次のように書いている。

「ああ、日本!・・・・・・
思わずこの叫びが口から出る。目のまえにひろがる風景をどうしても表現できないとき、こう叫ぶのがせいいっぱいであある。」

そして京都を旅行した際に、行楽を楽しんでいる日本人たちをとても幸せそうだと述べている。以下、「幸福」「幸せ」が描かれた部分に①から⑲まで番号を付して解説していく。

①「ああ、美しくて神秘で、閑寂な土地！　とはいえ、こうした魅惑にすっかり酔いしれるのは外国人の性に合わない。日本人は時間の値うちにまったく無関心だから、名所旧蹟から名所旧跡へ、「ちゃや」から「ちゃや」とめぐって、風景を賞でる。ひどくくたびれると、木陰で手足を伸ばして、夢想家のように黙って風景に見とれ、幸せにも、生き甲斐を感じている・・・・・・ああ、幸せな人たち・・・・・・」

下限部の原文：“Ditosa gente...”

西洋人のようにせかせかせずにのんびりくつろいでいる日本人をモラエスは羨ましく眺めている。しかし、野外でのんびりと幸せそうにしているだけなら、日本人に限ったことではあるまい。モラエスが羨ましく思うのは、素晴らしい風景と、長い歴史や宗教から生まれた厳かな神社仏閣などが組み合わさった「日本的な空間」と、そしてそこに当たり前に溶け込んでくつろいでいる人たちの一体感である。
　しかしその一方で、モラエスはすぐ後の文章で、西洋化によって日本らしさが失われていくことを危惧している。

②「ああ、幸福な日本よ、バラ色の夜明けの光が世紀の悲しい暗闇のなかに消えやすいのと同様に、おまえのその幸福もまた、どんなにか消えやすいことか！・・・・・・ だが、いわせてほしい。もしおまえがそんなに身にあわない山高帽や靴を使わなかったとすれば、機関車がおまえの野山をひっかかなかったとすれば、たぶん、もっと幸福であったものを。世界がおまえにとって、おまえそのものであり、おまえだけのものであったとすれば、もっともっと、幸福であったものを！・・・・・・」

原文：“Feliz Nippon, como a tua eistência desliza fácil, como uma aurora cor-de-rosa, no negrume triste do século!... Mais feliz talvez, deixa-me dizer-te, quando não usavas chapéu de

coco, nem botas, que te ficam tão mal; quando as locomotivas não sulcavam os teus campos; quando o mundo para ti, ó Dai-Nippon, eras tu mesma, e eras só tu!...”

ここで幸福だと述べているのは、日本人という「人」ではなく、Nippon あるいは Dai-Nippon という「国」である。そして西洋化により前述のような日本的な風景が損なわれ、日本人の姿や考えが変容していっていることを嘆いている。

2-3. “Dai-Nippon (O grande Japão) ” (1897)（邦題『大日本』）[10]

ヴァスコ・ダ・ガマのインド洋航路の発見から四世紀経ったことを記念して、リスボン地理学会が出版した本の一つが本書である。モラエスが重要な記念出版物の執筆を任された理由は、前作 “Traços do Extremo Oriente” が高く評価されたためであるが、その背景には日清戦争に勝利した日本に対する関心がヨーロッパで高まっていたことがある。

本書の冒頭は、世界を旅してきた友人が語った話であるとして、ポルトガルの植民地の国々の印象が述べられている。

（アフリカについて）

「そこには、チンパンジーや、ゴリラの近親である幼稚な種族が住んでいて、高い木の梢から衒学と背教の曾孫に避難を浴びせて罵るだろう。」

「熱中する仕事といえば、戦争、掠奪、野獣との闘争、マニパンソという呪物崇拝。そのアフリカでないときは、回教の息吹を吸いこんで、アラアの神のために生きる他のアフリカ。」

（アラビアについて）

「アジアでも、はるかな西域には、いまでもマホメットの掟の烙印、民族の陋劣と卑屈が残っている。太陽の赤熱で焼きつけられている岩石が積み重なっていて、巨人の死かばねに似たまる裸で、樹木も草むらも苔さえもない恐ろしい不毛。それこそは、アデンであって、実に、このうえもない皮肉で「幸福なアラビアよ！」と呼んでいる呪われた国の変転きわまりのない姿なのだ。」

下線部の原文：“a Arabia Feliz !”

（東南アジアについて）

[10] W. de Moraes. “Dai-Nippon (O grande Japão) ”. Imprensa Nacional (1897). 本稿では『定本モラエス全集 II』集英社(1969)に収められている花野訳を用いた。

「シャム・・・・・・泥水の河、密林、沼沢、パゴダ、恐ろしく大きい暖炉に似たまっ赤な太陽、軽蔑すべき国民。さらに不快なのは、近くのシンガポールと海峡植民地の諸都市。はるかかなたにフィリッピン。それから、さらにもっとかなたにジャワとスマトラ。ついでポルトガル領のチモールと遠くかなたの香港、などなど。―それらはとても金儲けができる国々、無数の生産と産業の市場であるが、自然は過酷で社会関係がうまく融けあっていない。そして、白人植民地居住者の豪壮な邸宅や管理事務所のかなたに、不潔で、ひどく窮迫している生活絵図がひろがっている。」

（中国について）
「こうしてついに、今、住み慣れているこのシナにやってきた。ああ、このシナこそは四億の人口があって、恐ろしく広大な土地を領有し、営々として疲れを知らぬ耕作と産業活動をつづけているにもかかわらず、いずれの国より絶望と煩悶の国なのである。」

このように、いずれの地域に対しても辛辣な評価をくだしている。アフリカについては、今日では人種差別として非難される表現である。アラビアについては「幸福なアラビアよ！」とあるが、これはモラエスが書いているように皮肉であって、実際は「呪われた国」だと述べている。そして当時マカオ赴任中でよく見知った中国については、ヨーロッパに侵略されて清朝の末期を迎えており、人々が絶望と煩悶に苦んでいるとしている。これらの評価は、友人が語ったこととしているが、モラエス自身の体験に基づくものであって、次に述べる日本との対比を際立たせるためにあえて過激な表現を使ったのであろう。

日本は、それらの国と違って国民は幸せに暮らしているとし、その理由を次のように述べている。

③「こうして、大日本は、その国土の快適さと豊饒の威力と、あたりいちめんに活気の横溢している風光の明媚によって、いまもなお、神話の進化過程にとどまっていて、その信仰に執着している。太陽、「みかど」、自然全体を拝んでいるが、今日もなお、ことごとくが太陽をその根原にしているのである。神道主義者であり、飢えと貧しさの悩みにも、いろいろな事件の悲しみにも、打ちひしがれはしなかったし、苦しみの涙も、けっして「むすめ」の目を濡らさなかった。要するに、国民がひとしく、いつも幸福と思っていたので、いまもなお神道主義者である。」

原文：Dai - Nippon pára no caminho evolutivo dos mythos, estacional nas crenças; é shintoista hoje, adorando o sol , e o mikado , e a natureza inteira, como o foi no seu berço; é shintoista hoje, porque não o empurrou para diante o aguilhão da fome e da miseria, nem a tristeza das cousas, porque jamais lagrimas de dor humedeceram olhos de musumé, porque se sentiu sempre

feliz, emfim.

ここでは、日本人の幸福の理由を神道によるものと述べている。温和な気候や豊穣をもたらす太陽への崇拝を内包する神道は、人々の幸福を約束し、国民を団結させている宗教であるとモラエスは考えた。

また、内容とは別に、ここで注目したいことは、花野は「国民がひとしく、いつも幸福と思っていたので」と訳しているが、原文では主語が「大日本」と国になっている点である。前述の②と同じく、日本という国に人格を持たせた表現している。日本が、同質な価値観や思想・宗教を持つ国民で構成されているからこその表現法といえるだろう。

次の例は、神道や昔話などにみられる神話・伝説の形成についてである。やや長くなるが引用する。

④こうした文学の精神がそれとなく察しられる。開化の波にのらないで、相変わらず、原始的民族、昔の時代の文学であって、今日の文学も百年まえの文学である。説話、神話、英雄の伝説を題材にしているし、動物、神々、戦士を主人公にしている。抽象的な同じ観念、たとえば、悪や善や勇気を骨子にしている。心は観念ではなく、人物の演劇を遍歴する。すべて文学するのは、単純な人が理解する最も自然な形式として、結局、事物と感情を人間化することであるから、その文学は、当然、寓話的なものやたとえ話や、さては叙事詩までなる。「きもの」や「ぞうり」を身につけて、説話の生物どもが場面に現れることになる。人の形をした神々や悪魔どもが、栄光に充ちた礼讃を浴びて、議論を述べる対象になる。戦士が復讐の槍で交戦し、血が叛逆者からふき出することになるインドの讃美歌、その聖書の福音を信じている全人類の幼稚さから生まれた独特で善良な、ときには、崇高な文学になる。だが、日本の小宇宙では、大して向こうみずなものにはならなかった。幼稚で、ほほえましくて、菊の花のように幻想的であって、いつくしみながら教化し、ときには、ユーモリズムの晴れ着を着せかけている。幸福な国民の所産であるので、皮肉や、冒瀆や、絶望や、呪いを爆発しないのである。

下線部の原文：“filha d'um povo feliz”（直訳すると幸福な国民の娘）

日本の神話や伝説に登場する者たちは、日本人が善良であるがゆえに悪意がなく、皮肉、冒瀆、絶望、呪いが文学的に表現されていないと述べているが、まったく首肯できない意見である。本書はモラエスが日本に住み始めたばかりの時に書いたものなので、英語またはフランス語に翻訳された記紀や限られた文献しか知らないために、そのような感想を抱いたののかもしれない。

2-4. “Cartas do Japão”（邦題『日本通信』）

前作『大日本』を書いた後、モラエスは神戸で外交官としての職を得た。1899 年（明治 32）にポルトガルのポルトの新聞「ポルト商報」の社主ベント・カルケージャ（Bento Carqueja）が来日してモラエスと会ったが、彼の依頼で 1902 年（明治 35）から “Cartas do Japão”（邦題『日本通信』）と題した日本を紹介する記事の連載が始まった。日本通信は 1913 年（大正 2）まで続き、後に 6 巻の本として刊行された[11]。

以下、1 巻、3 巻、5 巻から引用する。日本語訳は、『定本モラエス全集』の II と III に収められている花野訳を用いた。

⑤「新年の祝賀は本質的に日本のお祭りでもあるし、数知れないみじめな労働者が一日中のびのびと休める、たった一日だけのお祭りでもあるこの祝賀の日は、いつも街頭のお祭り風景や派手に着飾って通るおびただしい人の列や民衆の喜びようが目に見えるようであって、まるで子供のように喜び、来たる年に希望をかけて、生きるために過去の苦しみを忘れて、愛国心に胸をふくらませて天皇を尊崇し、栄光を夢みてあたりのすばらしい情景にうっとりとなる祝賀の日である。幸福な国民よ・・・・・・」

（1903 年 3 月 18 日の記事より）

下線部の原文：“Feliz povo!...”

モラエスが描写したのは、幸せそうに新年を祝う人々で溢れている正月の街の光景である。「栄光を夢見て」という言葉から、国民が日本の将来に希望を膨らませていた時代であったことがうかがわれる。

次の例は、人間ではなく老樹が幸福の対象物となっている。

⑥「ほんの数日前、唐崎に杖をひいたとき、その神秘な樹木がひどく萎れているのを確かめたが、それでもまだ葉はしゃんとしてあおあおした羽飾りをたてていたし、針状の葉は密集する毛まりのようになって群がっていたし、松かさがそこここに実っていて、この大きい老木にもまだ樹液がみなぎって生き生きした春の太陽の光線に、年に似合わない青春が脈打っているのを、はっきり知った。

ああ、幸せな老樹よ！・・・・・・」

[11] 1 巻から 6 巻は、それぞれ 1902-1904 年、1904-1905 年、1905-1906 年、1907-1908 年、1909-1910 年、191-1913 年の記事がまとめられている。これらは 3 つの出版社から刊行された（1,2 巻は Livraria Magalhães & Moniz、3 巻は Lello Editores、4〜6 巻は、Portugal-Brasil）。

（1903 年 12 月 6 日の記事より）

下線部の原文： “Ditoso velho!..” （幸せな老いたものよ！）

この老樹は、滋賀県大津市の琵琶湖畔にある「唐崎の松」のことである。伝承によると初代は舒明天皇 5 年（633）頃に植えられたとされ、枯れた後、二代目が天正 19 年（1591）に大津城主新庄直頼公等により植えられた。モラエスが訪れた時には、樹齢三百年を超えた老樹であり、記事に書いているように樹勢が衰えており、大正 10 年（1921）に枯死した[12]。しかし、モラエスはむしろこの老樹に若々しさを感じて、その長命ぶりと人々に慕われていることを祝福している。

次の例は 3 巻のはしがきである。3 巻には、“A Vida Japoneza（日本人の生活）”というタイトルが付されているように生活に関わる内容が多い。はしがきには、日本の若い女性 “musume（むすめ）” の素晴らしさを次のように紹介している。

⑦「日本での最もすばらしい魅惑、「むすめ」よ！・・・・・・私としては、「むすめ」の白くて小さい手に導かれて、無理にここにつれられて来て、けっして捨てられることはしないと、告白する。寝ていてさえ、くちびるに、たおやかで繻珍のようなその手のあたたかみをおぼえる。花盛りの桜花、あおあおとした松林、お祭りの日のお社、古い伝説説話の地、小さい紙の家、幸福な国民のことを教えてくれて、この魅惑の国のうっとりする道にひきいれてくれたのは、彼女だ。彼女は、これからどこへつれていくのだろうか・・・・・・」

（1907 年 2 月 19 日、3 巻のはしがきより）

下線部の原文：“povo feliz”

ここでいう「幸福な国民」は、桜、松、神社仏閣、伝説説話などの自然と文化に囲まれて暮らす日本人を指しているが、言外に「むすめ」が日本人の幸福の象徴であるといわんとしている。

次の「幸福」の例は、隠居する老人である。

⑧「「いんきょ」は、あまりわずらわしいことに長くたずさわらない幸福な人だという他に、じっと座っているという特殊性によって、国民の伝統の大きい柱、大事な芸術の

[12] その後三代目の松が育てられたが、それも現在枯死寸前となっており、四代目の育成が進められている。

保護者、日本の武士道の継承者、日本民族の典型的な気質の保持者、伝達者になっていると十分に断定できる。」

（1905 年 7 月 13 日の記事より）

下線部の原文：“além de um feliz”（幸福のほかにも）

モラエスは、さまざまな著作の中で、吉田兼好や鴨長明に代表される隠者文学の存在についてたびたび言及している。この記事を書いてから 8 年後、自分もまた領事の職を辞めて徳島に隠棲することを決め、それが自分が求めた幸せな生活であると表明することになるが、この時からすでに隠居に親近感を抱いていることは興味深い。

次の例は日本の庶民の食事風景である。

⑨「幾度か日本の家庭の食事にであって一緒に加わったことがあるが、その食事は米のご飯と酢づけの生野菜と飲物として白湯だけの食事だった。食べていたすべての顔に満足があったと思ってくれたまえ。食事がすむと、大人も子供も神々に感謝し、幸せにふくらんで、それぞれ自分の仕事にとりかかる。」

（1906 年 1 月 27 日の記事より）

下線部の原文：“e vão felizes”（幸せそうに立ち去る）

質素な食事に満足し、神々に感謝する人たちの様子をモラエスは好ましく眺めている。質素な生活を良しと評価するのは⑪でも出てくる。

⑩「どのようにして、いつ、日本人がキリスト教化するだろうか・・・・・・けっしてそんなことはできない。日本が、その幸福で自信に満ちた自然愛好の感情、特有な性格を保有しているかぎり、けっしてできない。」

（1906 年 6 月 27 日の記事より）

下線部の原文：“affectibilidade naturalista de povo feliz”（幸せな国民の自然愛好）

何度も出てきたようにここでも国土の豊かな自然を愛し、その恵みを享受している日本人が幸せであると述べている。そして、日本人が幸福である限り、キリスト教が受け入れられることはないだろうと考えている。

次の例は、モラエスが城崎温泉に出かけた時に、津居山の集落で人々が黙々とイカを加

工している様子を見て、都会とはかけ離れた寒村で暮らす人たちにとって幸福とは何だろうかと考えを巡らす場面である。

⑪「その時、こちらをふりむいてもくれないあの人たちが、はたして幸福なのかと自問した。幸福かと聞いたら、たぶん幸福だと答えただろう！が、幸福とはいったいなにか。劇場に行くとか、絹の「きもの」を着るとか、暖かい珍味を味わうとかが幸福なら、あの人たちは不幸だ・・・・・・ただ一つの感応作用―労働―で、生きている。くたびれたら眠るし、ひもじくなれば食べる。春の陽がぽかぽかしていて、かぐわしい山の気がさわやかなので、一時的な快感が皮膚や嗅覚を刺戟するのはもちろんだが、そのうえ、自分自身と大勢の子供との生活を愛するのに、均衡がとれた生活をすれば、それで十分だ。人間の生活というより、むしろ小動物が群棲している生活にも比べられる生活、たとえば、蜜蜂や蟻が各自の宿命の法則にのっとった感嘆すべき生活をしているような気がする・・・・・・」

（1909 年 10 月 18 日の記事より）

下線部の原文: “feliz”（幸福）、“infeliz”（不幸）

都会的な楽しみがまったくない暮らしであっても、自分と家族がやっていければ、それで十分幸福なのだと言っている。本能で生きている蜜蜂や蟻のような小動物の群れのようなものだが、生物の宿命に則っているならそれで良いのだとモラエスは考えた。これは、そこに生きる村人を見下した考え方と受け取られかねないが、モラエスは生き物全般に愛情を注ぐ人物であることを忘れてはいけない。

次の例は、また初詣に賑わう人々についてである。

⑫「日本人はいそいそとそうした運命を全面的に信頼して、まるで両親を訪問する子供のように神社まいりをする。ここでは神々は国民の両親なのだ。

しあわせな国民よ！・・・・・・」

（1910 年 1 月 24 日の記事より）

下線部の原文: “Feliz povo!...”

2-5. “O “Bon-odori,, em Tokushima”（邦題『徳島の盆踊り』）[13]

[13] W. de Moraes. “O “Bon-odori,, em Tokushima”. Livraria Magalhães &Moniz (1916). 日本語訳は『徳島の盆踊り』（岡村多希子訳、講談社、1998）を用いた。

1912 年（明治 45）におヨネが亡くなると、翌 1913 年（大正 2）にモラエスは領事職を辞め、「日本通信」の寄稿を終了させ、おヨネの故郷である徳島に引っ越し、隠遁生活を始めた。文筆活動は続け、カルケージャの求めにより徳島での生活を記した随想を「ポルト商報」に送ることになった。最初の記事は 1914 年（大正 3）の 2 月であり、1915 年（大正 4）10 月まで続けられ、1916 年（大正 5）にまとめたものが刊行された。

徳島でみた幸福もまた、寺社への参拝とともに年中行事や行楽を楽しむ人々の姿であった。

⑬「幸福な、とても幸福な人たち！・・・・・日本の運命を左右する最高の霊たちとつねに一体化して生を送る幸福な人たち。（中略）一般に宗教的実践は、戸外で弁当を味わい、巡礼者が肩や腰に下げて持ち歩く瓢箪から「さけ」を注ぎ、木々に美しい花が咲きみだれる心地よい景色を眺める、絵のような遊山の魅力と結びついている。・・・・・幸福な、とても幸福な人たち！・・・・・」

（24 章「徳島人の信心ぶかさ 天候への関心」より）

原文 : この段落の最初と最後は、まったく同じ文章 “Feliz gente, muito feliz! ... ” である。

そして、本作ではモラエスの視線は自分の心うちにも向けられるようになり、人生の大転換であった徳島移住について触れ、四軒長屋の狭い家と狭い庭の生活が、自ら望んだものであることを語る。次の⑭⑮⑯は、老境に入り引退した人が幸せであることを似た書き方で書き綴っている。

⑭「私のように、その精神へのたのしみを庭になお見出すことのできる、猫の額のような土地を耕すことを喜びとする、自らの手で植物の世話をする、ちっぽけな芽が開いて葉や花になるのを喜びをもって眺める孤独の人は幸いである。」

（36 章「庭のしつらえ」より）

下線部の原文：“Feliz do homem solitário que”

⑮「人生の夕暮れに、旅路のほぼ終りになって、できる限り可能限り自国のために働いてきたあとで、その義務と権利を捨て、貧しく、忘れ去られて、その同胞たちの正当な無関心の経衣につつまれて、遁世するする可能性、口実、勇気を自らのうちに見出す人

は幸いである。」

（40 章「ペット動物たち 私の境遇と心境」より）

下線部の原文：“Feliz do homem que”

⑯「先に言った境遇にある人を私は幸福な人と呼ぶ。なぜなら、ひげが白くなり体力が衰えるとき私たちは立ち止まり生のための戦いを休戦にするべきだと考えるからだ。」

（40 章「ペット動物たち 私の境遇と心境」より）

下線部の原文：“Chamo feliz o homem nas circumstancias que apontei ”

モラエスが領事を辞めて徳島に移住したのは彼が 59 歳の時であり、老境に入ったことを自覚していた彼は、徳島で人生の終焉を迎えようと決心していた。引っ越してすぐに「ワタクシハ モシモ シニマシタラ ワタシノカラダヲ トクシマデ ヤイテクダサレ」と紙に書いて部屋の壁に貼った。自らの境遇を幸福であると繰り返し述べているが、⑯では徳島で死を迎える覚悟もまた感じられる。

次の例は盆踊り（阿波踊り）の場面である。モラエスが神道の神々を好んでいることは前述したが、神道や仏教では死後の魂の存在を認めていること、そして祖先の霊がお盆に帰ってくるとする仏教の風習にいたく感動した。おヨネから離れたくないという思いで、彼女の墓のある徳島に移住したモラエスにとって、死者の霊が絶えず見守ってくれていることを信じ、その存在を身近に感じている日本人は驚異であり、それが自分の救いになることを願った。しかし、お盆に彼が期待したようなことは起こらず、幸せそうに踊る民衆とは裏腹に、彼は疎外感を味わった。

⑰「彼ら、これらの日本人はみな、自分たちの死者たちと霊的に接触してまだ間がなく、心たのしく幸せにあふれ、くつろぎ、踊っています。明日は、気持ちをとりなおしていつもの暮らしに戻るでしょう。私はちがいます。私は私の死者たちと接触しませんでしたし、誰も彼らについて何も私には話してくれませんでしたし、祭りに意識的に参加することはできませんでした。・・・・・・」

（68 章「ふたたび盆踊り　死者への追慕」より）

原文：“Elles, todos estes japonezes, estiveram ainda ha pouco em contacto es piritual com os seus mortos, sentem-se alegres, felizes, folgam e dansam”

2-6. “Ó-Yoné e Ko-Haru” 邦題『おヨネとコハル』

徳島で一緒に暮らしていたコハルは、1916 年（大正 5）10 月 2 日に結核で亡くなった。

そしてまもなく彼女の死を描いた小品 “Ko-Haru” を「ポルト商報」の別冊に発表した。その後に発表した小品と一緒に 1923 年（大正 12）に “Ó-Yoné e Ko-Haru” として刊行された。本稿の冒頭に書いたように、本書は弱者に対する哀れみを主題にしており、幸福な人間はあまり出てこない。

次に挙げる例は、モラエスが眉山の山道を散歩していて小さな集落に辿りついた時に、周囲から隔絶されたのどかな風景の中で暮らす人々を想像して書いたものである[14]。

⑱「ああ、しあわせな人たちだ、きっと、あそこに住んでいる人たちは！・・・・・・夫、妻、子どもたちが思い浮かぶ。単純な野良仕事、類のない静寂な環境、まわりには親しい顔があるだけ、それらすべてが、他から隔絶しているその家族の生活を慰撫にみちた清澄さ、町や村の人々が多数あつまっているところには見られない清澄さでつつんでいるにちがいない・・・・・・。」

下線部の原文：“Oh, feliz gente, por certo, a que alli vive!... ”

その集落には火葬場があり、被差別部落であったことをモラエスは知る。そして、そのような地位の人たちが存在することについて「なんと馬鹿にしたはなしだろう」と嘆くのである。彼は、神戸にいた時にも「日本通信」の中で、かつて神戸の火葬場で働いていて、みすぼらしい家で一人暮らしをしている老婆について温かい視線を向けた記事を書いている。そこには、こういう境遇の者こそ祝福され、幸せになるべきであるという彼の願いが込められている。

2-7. “Relance da Alma Japoneza” 邦題『日本精神』[15]

本書は、モラエスの最後の著作である。内容的にはこれまで彼が書いてきた日本論の焼き直しという感がいなめないが、30 年近く日本に暮らしてきたにも関わらず、初期の『極東遊記』や『大日本』から彼の日本感がほとんど変わっていないことは驚かされる。もちろん、来日当初の熱狂的な日本賛美はなくなってしまったが、日本精神が世界に新たな道筋を示していくことに希望を抱いている。

幸福論について重要な言及はほとんどないが、日本女性の美点について記した以下の一点だけを取り上げておく。

---

[14] W. de Moraes 著.岡村多希子訳.『おヨネとコハル』.ことのは文庫（2023）176-190 頁.

[15] W. de Moraes.“Relance da Alma Japoneza”. Portugal-Brasil （1925）. ここでは岡村多希子翻訳による『日本精神』（彩流社 1996）を用いた。

⑲「地位は低くとも日本女性はきっと自分を幸福だと思っているのだ。すぐれて献身的、繊細きわまりない魂、伝統と教育によって、すべての人を満足させるためにやさしく親切であるべく一生懸命につとめるよう従順の、自己犠牲の原則を教え込まれた、極端なほど没個性の日本女性は、家庭にあっては無であるどころかすべてなのだ。家族の喜びなのだ。そしてこのことにこそ彼女の全幸福は存するのだ。」

下線部の原文：前者は “feliz”, 後者は “felicidade”

モラエスの目には、男尊女卑が強い日本社会にあっても女性は幸福そうに映った。自己犠牲と没個性は、女性に限らず日本社会全体にみられることであると他の箇所で書いているが、女性の場合は特にそれが家族に向けられることをここでは指摘している。個人主義や男女同権の考え方が浸透した現代の日本では、このような考え方は薄まっている。

3. モラエスにおける「幸福」

前章ではモラエスが「幸福」だと考える対象や理由を作品の中から列挙した。当然ながら内容的に重複しているものも多く、それらを類型化してまとめたのが右の表である。いくつかのものは、複数の項目にまたがって入れている。

幸福である理由や対象	該当番号
自然・風景	①③⑥⑩
宗教（神道、仏教）	①③⑫⑰
年中行事	⑤⑫⑬⑰
隠居・隠遁、孤独	⑧⑭⑮⑯
清貧	⑨⑪
女性	⑦⑲
被差別民	⑱
その他	②④

項目名でいうと「自然・風景」「宗教（神道、仏教）」「年中行事」に関する言及が多い。比較的温暖な気候によって育まれた豊かな自然や美しい風景は、他の国々を巡ってきたモラエスを感動させるものであった。また、多神教の神道には、日本らしさが如実に表われていると考え、また仏教とも関連した多くの年中行事において人々が楽しみ幸福を分かち合う様子は、モラエスにとって心惹かれる光景であった。前述の『逝きしし世の面影』の中で、渡辺は、1860 年（万延元）に香港から来日したジョージ・スミス（George Smith）主教が、神道の信者は現生の幸せを最大の目的としており、人間の生活についても物事の明るい側面に注目することを好むと指摘していること、また、パリのギメ博物館の創設者であるエミール・ギメ（Émile Étienne Guimet）は、1876 年（明治 9）に来日した際に、日本の神々は恐れを抱かさせるものではなく、親しみを感じさせる存在であると指摘したことを紹介している。日本における宗教は、信者の宗教的態度において西洋のキリスト教

とまったく異なるものであることは明白であった。

また、モラエスは「隠居・隠遁」し、「孤独」な暮らしを送ることを幸せだと考えた。おヨネの死後に、徳島に隠遁してから書かれた『徳島の盆踊り』にみられる⑭⑮⑯は、いってみれば自分の決断を肯定するために書いた文章だが、それよりも前に書かれた⑧において隠居を肯定的にとらえているのは興味深い。将来、自分が隠居することを意識していたものだろうか。

そして、「清貧」を良しとする考え方もモラエスらしいといえる。彼自身、物欲のない人物であったし、マカオや徳島では、他の外国人が暮らすような豪華な家で贅沢な暮らしをしようとはせず、貧しい人々の居住区に住み、質素な生活を送った。このような気質は、孤独な隠遁生活を幸せだと考える点に通じている。

本稿の最初で、弱者に対する「哀れみ」の視点がモラエスの特徴であると指摘したが、モラエスは、友人セバスティアン・ペレス・ロドリゲス（Sebatião Peres Rodorigues）に宛てた手紙に「ぼくは君と同じように、あわれな人間に、とりわけ女性にはどんなこともゆるす男だ。」と書き送っている[16]。そのような例として、⑱では火葬場近くに住み、周囲から隠れたように暮らす被差別民について、幸福であろうという書き方をしている。弱者イコール不幸な者とみるべきではないし、むしろ幸福であるという彼の考えが表れている。女性については、⑲において社会的地位や家庭内での地位が低いと指摘しているが、モラエスは弱者としては捉えておらず、幸福な日本人を体現する存在として賛美している。

このようにモラエスの考える「幸福」を整理したが、彼自身は幸福であったのだろうか。モラエスは幼いころから不幸感、憂鬱な気分がつきまとっていた。「子ども時代いちどとして幸福だったことはない」と述懐している[17]。モラエスの人生の中で、神戸時代におヨネと過ごした時期は、最も幸せな時間であったことは想像にかたくない。そして彼女の死は、モラエスの人生を大きく変えた。仮に外交官の仕事に未練があったとしても、それを投げ打っておヨネの墓の側で暮らすと決心した彼にとって、徳島での生活は幸福を求めたわけではなかったろう。しかし、隠遁、孤独、清貧といった彼が考える幸福のキーワードは、自身のことでもあり、その意味では幸福に過ごす環境に身を置いたことになる。彼を評価する際に、晩年は孤独で可哀想という者がいるとしたら、それは間違いであり、モラエスの後で神戸の領事を務めたアルブケルケ（Cerveira de Albuquerque）やソーザ（Francisco Xavier da Silva e Sousa）がモラエスの生活を心配して世話を焼こうと申し出ても、モラエスは固辞した。彼は徳島で自ら望む生活を送り、人生をまっとうしたのである。

---

[16] W. de Moraes 著. 岡村多希子訳『ポルトガルの友へ・モラエスの手紙』彩流社(1997) 38 頁.
[17] 岡村多希子.『モラエスの旅』彩流社(2000).